

『やさしい踏切』

名塚 かずや

ト、多田と森山は碁笥から石を掴んで盤上に離す。

○登場人物

森山 私白ですね。

多田 先にコミ渡しちゃいます？

森山 もりやまなお
森山奈緒(28)

多田 ただすぐる

多田 優(29)

ト、二人は打ち始める。

仙台市の柏木にある年季の入った碁会所。

白熱灯のオレンジじみた灯りが部屋を照らしている。

細かく傷のついたカウンターと、何台かの丸机。

時折、電車が走る音と踏切の遮断機の音が聞こえてくる。

入口の近くには覆いをかけた卓上盤や碁笥、チエスクロなどが纏められていて、まるで引っ越しの前の様相だ。

虫の鳴く声のする秋の夜。

机を挟む椅子の一方に多田優は座っている。

店の奥から、森山が一台の卓上盤と碁笥を持ってくる。

森山 これ、うちに残すやつ。

多田 え、立派じゃないですか。

森山 多分、そうでもないですよ。本力ヤとかじゃないし。

多田 そうかな。(碁笥を受け取つて)ありがとうございます。

ト、森山は碁盤を挟んで多田に向かいに座る。

ト、森山は立ち上がり、食器のあるカウンターに向かう。
ケトルからお湯をとつて、急須に汲み蒸らし始める。

森山 握りますか。

多田 はい。

森山 手伝つてもらつちゃつて、ありがとうございます。今日。

二人が打ち始めてしばらくしたころ。
盤面は中盤。隅で実利を稼ぐ白に対し、黒は厚みを築いている。

多田は盤面を見て状況を分析する。

多田 全然足りないな。

森山 え、そうですか。

多田 や、隅でこんなに稼がれてて、中央だけで間に合う気がしない。

森山 や、まだわからないじゃないですか。

多田 だつて、荒らしてくるでしょ？

森山 まあ、頑張ります。

多田 負けるつて。あーもう。考えさせてください。

森山 じゃあ、お茶、入れてきます。

多田 あ、ありがとうございます。

多田 いや、全然。むしろこんな時間になっちゃって。

森山 そこからこうして付き合つてもらつてるんで、頭あがらないでです。

多田 その割、手加減してくれないですよね。

森山 互角の人に手加減する余裕ないです。

多田 嬉しいけど、やっぱり勝ちたいなあ。

森山 私も。

ト、森山、お茶を入れたカップを渡す。

（受け取つて）ありがとう。

多田 森山 热いから、ずっと持つてない方いいかも。

多田 わかりました。

ト、多田は傍にカップを置く。

森山は座らず、広くなつた店舗の中を見回している。

森山 やー。しかし。2年もよく持ちましたよね我ながら。

多田 多田 え。

森山 ここ。

多田 よくつて。だつて頑張つてたし。

森山 頑張つてましたよ。私、今自分の事ほめています。

多田 多田 すごい。

森山 ふふ。

今、街中の碁会所、どのくらいあると思います？

多田 ……駄前と、片平とか。

森山 どつちもなくなつちゃいました。

多田 え。

森山 コロナで。

多田 そうなんだ。

そんな中でも頑張つてたなあつて。お客さん全然来なかつたし、結局ウチも畳んじやうんですけど。

多田 ……。

森山 あ、でも片平の方は移転して復活したんですよ。大学病院のあたりに。今度からはそっち行きます？

多田 ……行かないかな。怖いし。

森山 常連さんで固まつてそうですもんね。

多田 前、別の碁会所行つたら、誰も相手してくれなかつたことあつて。

森山 あー。

多田 森山 ここなくなるの、大きいですよやっぱり。

森山 そつかあ。

ト、多田は一手打つ。

森山は音で気が付いて

ト、多田は一手打つ。

森山 あ、打ちました？

多田 森山 ここに。

多田 森山 え、めつちや踏み込んでくるじゃないですか。

多田 森山 や、こうでもしなきや勝てないし。

多田 森山 えー。わくわくしますね。

多田 戰々恐々ですよ。こつちは。

ト、盤面を見ながら次の一手を考える森山。

多田はお茶を飲みながら、片付けた碁盤などを見ている。

多田 明日は、来なくていいんですか？

森山 はい。桜丘教室さん、何人かで軽トラで来るつて言ってたの

多田 多田 そつか。全然、来れるんだけど。

森山 多田 そつか。全然、来れるんだけど。

多田 森山 や、申し訳ないです。結構早い時間だし。

多田 森山 別に、それは……。

えい（ト、打つ）。

多田 森山 ……うわ。

森山 真っ向勝負で行きましょう。

多田 ですよねえ。おっし。

ト、多田、森山は暫く無言で打ち合う。

何手か打ち進めながら

森山 私、多田さんと打つの、やっぱり好きです。

多田 え？

森山 ふふ。や、あんまりいい言葉が思いつかないんですけど、私と同じくらいの強さで、同じくらいの歳の人って、なかなか打つことないじゃないですか。

多田 確かに。

森山 負けたくないなつて思える人と打つのつて、こんなにいいものなんだなつて。楽しいんだなつて。思つて。思つてたんです。

多田 そつか。

ト、多田は少し考えながら、打つて

多田 僕もです。

森山 嬉しい。

多田 (何かに気が付いたように)あ。

森山 ん？

多田 なんでもないです。

森山 ……こつちが先かな(ト、打つ)。

多田 (無言で打つ)

森山 (無言で返す)

ト、お互い二手ほど続け、多田の手番に。

多田 ……負けました。

森山 ありがとうございました。

多田 ありがとうございました。うわー。

森山 いや。これ全然、十手前で互角でしたよね。

多田 先にアテてからハネてればなんとかなつたかもだけど。このキリを完全に見逃してた。

多田 あー。……ちょっと戻しますけど、この手でこの石抱えてたら二眼出来そうじゃないですか？

多田 確かにそう思つたんですけど、その間にこうへんに打たれたらどう頑張つても足りなくなるなつて思つて。じゃあ外で眼つくつた方がいいかなあって。

多田 確かに、そつか。

森山 やー、悔しいなあ(ト、片付けようとする)。

多田 あ、崩さないで。

森山 しばらく置いておきたいなつて。

多田 え、性格悪くないですか？

多田 だつて、ライバルに勝つたつて、すごい嬉しいことですよ。僕、勝つてもそんなことしないですよ。

多田 しばらく多田さんと打てなくなりそうだから、記念に。

多田 わかりました。

森山 え。

多田 しばらく置いておきたいなつて。

多田 え、結構急なんですね。

多田 です。でも、早く働かないとお金やばいから。

多田 茅ヶ崎所つて正直、お金の面だとどうだったんですか？

多田 うーん。毎日200人お客様来てくれるなら、茅ヶ崎所だけで生活出来たと思います。

多田 20人か。

多田 そもそも父のときから、半分趣味みたいな感じでやつてたみたいですし。家賃とかももうかかつてないから、今までは何とかなつてたんですけど。流石に父にお金かかるよう

になつちやつたので。

多田 お父さん、今どんな感じなんですか？

森山 どんな感じ。どんな感じって言えばいいんだろう。歩けなくて、ちょっと認知が入ってきて……ウチじゃもうどうにもならないから、施設で面倒見てもらつて。つていう。

多田 ……ごめんなさい、立ち入つたこと聞いて。

森山 別に、気にしないでください。それに、私もいつか、こうしなきやなあつて正直思つてたんです。初めから私、暮会所やつて生活しようつて思つてたわけじゃないから。

多田 そうなんですか。

森山 そうなんです。元々私、会社勤めだつたんですよ。精神的にアレになつちやつてやめちゃつたんですけど。緊急避難的に家に戻つてきただけだから、いつかは戻らないとつて思つてはいて。先延ばし先延ばしにしちやつてたんですね。

多田 ああ。

森山 派遣でもなんでも、ここでお客様待つてるよりはお金入るし。まあまず、やれるだけやつてみようかなつて。

多田 ……なんか、こういうこと言うの無責任ですけど、森山さん、偉いですよね。

森山 え？

多田 だつて、自分だけじゃなくてお父さんのことまで考えて一人でやつてきて。今までだつてずっとそうじゃないですか。それつて、すごいことだと思う。

森山 ……そうかな。

多田 うん。

森山 別に、それしかなかつただけですよ。そうしようつて選んでしてゐるなら確かに偉いのかもしれないけど。何もしなかつたら、親捨てた感じになるんじゃないですか。そういう、悪者になる勇気が私になかつただけで。自分のためですよ。全部。

多田 そういうもんですか？

そういうもんです。

そんな、ちゃんとそういうこと考える機会、ほかの人はあまり来ないだけで。森山さんが酷い人とか、そういうことをやないと思うけど。

多田 ……多田さん。

多田 はい？

森山 いや、やさしいですよね、つて。思つて。

多田 なんですかそれ。

森山 ちょっと、すごいなつて。

多田 気つかつて言つたわけじゃないですよ。

森山 だと思いますけど。

多田 うん。

森山 励まそ、とか。そういうのつて。あ、言葉を探してるなつて分かるでしょ。頑張つてくれてるなつて。それが、ないですよね。

多田 思つたこと言つただけですし。

森山 今回の件も、すごい手伝つてくれてたし。今日だけじやなくて。多田さん、すごいなあつて、思うじゃないですか。

多田 ……ありがとうございます。

森山 や、こつちがあります。今日まで、ほんとに。

多田 ……。

ト、森山は頭を下げる。

多田 多田さん？

森山 初めてここに来た日の事、思い出しますよ。時々。

多田 雪酷かつた日でしたよね。転んだつて言つてた。

森山 多田よく覚えてますね。

多田 だつて、あんなにズボン乾かしてゐる画、忘れないですよ。

森山 多田覚えてて欲しくなかつたな。それは。

思つたんだと思うし。でも、なんか、昔の事もう、あんまり思い出せないんですよ。今ここにいるのも、あの人の子供だから以外の理由が思いつかなくて。

多田

森山

自分の親が今何歳なのか考えて。そんなこと、考へてる自分最悪だなって。毎日思うんですよ。そういうこと、平気で頭に浮かべて、今も多田さんと会つて。会つてたんです。付き合えないなって思いながら、話したいとか、親を施設に預けながら考へてたんです。ひどいでしょ。

多田

森山

……多田さんはやさしいから。付き合つたら私の事、切り捨てられないと思う。いつか愛想だけで笑うようになつて。多田さん笑うの上手いなあつて思つて生きていくの、嫌だし。気が付かないふりをするのも嫌です。そんな風に生きていくの、ひとりで生きていくよりずっと、みじめじゃないですか。だから。だからです。

ト、間

多田 別に、楽しいだけの人生送りたいなんて、思つてないです。

森山 森山さんにいろんなことがあるの、僕だつて分かつてます。

多田 森山さん、完璧主義すぎますよ。

対等つてなんですか。対等じやないつて森山さんが自分のこと勝手に低く見積もつてるだけじゃないですか。

お父さんの事、辛いって思つたつていいじゃないですか。周り巻き込んだつていいじゃないですか。誰も森山さんの事悪く言いませんよ。森山さんが楽しく生きることを許してないの、この世で森山さんだけですよ。

……でも、そういう私だつたら。多田さん、私の事好きになつてくれました？

多田

森山

森山

私だつて、多田さんに恰好悪いところ見せたくないなくて、頑張つてました。がつかりされたくなかったから。それで、やつと対等だつたんです。私がここで、「はい」つて言つたら、その時点で一生対等じやなくなります。

森山さんだけの理屈じやないですかそれは。

多田 森山 私の理屈です。私の、私だけの理屈です。

多田 森山 僕の理屈は混ざりませんか？

多田 森山 混ぜられません。

多田 森山 ……。そうですか。

多田 森山 すみません。

多田 森山 本当に、ごめんなさい。

ト、間。

多田 森山 ずるいなあ、俺。
多田 森山 なんで。

焦つたんです。ずっとこういう時間が続いてほしくて。ずっと森山さんと居たかつたから、曖昧なまま何も言わずにここまで来て。来たクセに、今更になつて会える理由が必要だつて焦つて。関係に名前を付けないとつて。

森山さん納得できないことを言つていてるつて、すぐ分かつたのに。折れてくれないかなつて追い詰めて。

多田 森山 ごめんなさい。謝るのは、僕です。

多田 森山 いい加減な気持ちでは言つてないです。それだけは、信じてほしいけど。

多田 森山 はい。

多田 森山 でも、今じゃない。ですよね。

多田 森山 はい。今じゃないです。

多田 はい。

多田 森山
森山 なんですか。
多田 一つだけ、お願ひしても、いいですか。

今まで、それなりに、会えなくなつた人がいて、会う理由

も話しかける理由もないのに、時々頭の中に出で来る人がいて。今何してゐのかなつて、仕事行く時とか、電車に揺られながら、思つたりするんです。もう多分、そういう人はずつとそのまま、分からぬままなんですよね。怪我したり、落ち込んだりしても。

頭の中で、森山さん、今笑つてゐのかなとか。楽しいことあるのかなとか。考えて、そのまま分からぬのが一番、僕にとつて怖いことなんだなつて、思つたんです。だから、今まで何聞いてたんだつて、思うと思うんですけど。

また、打つてくれませんか。

森山 多田

森山さんが、会つてもいいなつて思つたときに。

森山さんが頑張つてること、聞かせてください。

……待つてることですか。

多田 森山

待つてゐつてより、……待つてゐるのかな？

森山 多田

じゃあ、でも、待つてゐるだけです。全部、森山さんが納得いくまで。

それだけです。

多田 森山

……いま、打ちませんか？

ト、間。

……いま、打ちませんか？

多田 森山

もう一局。私が負けたら、またリベンジします。

じゃあ、僕が負けたら、また挑戦してもいいですか。

森山 多田

なんで、二人して、負ける話ばかりするんですか。

だつて、森山さんが、崩しますか。

……崩しますか。

ト、碁盤に並んでいた石を崩す。
崩しながら。

森山 都合よすぎますね。多田さんも、私も。

多田 だめですかね。

森山 ダメですね。

ト、二人は碁笥に入れきつて。

森山 待たなくていいですからね。私ただ、打つ約束しただけです。

多田 はい。

でも、頑張れてたら、頑張つての話、聞いてください。

多田 はい。

森山 頑張れそな気がするんです。立ち止まつても、思い出して、また歩き出せそうな。

ト、二人は碁笥に手を入れて。

多田 握りますか。

森山 はい。……私、黒だ。

多田 白番か。

森山 コミ。はい。

多田 はい。じゃあ、お願ひします。

森山 お願いします。

ト、二人は打ち始める。

遠くから、電車の遮断機の音が聞こえる。
夜が更けて、石音だけが先へ続いていく。